

溲標

今モ鶴岡修造ノ時ハ、此港ニ筏木ヲ運湊スト云フ、

〔東關紀行〕かくしつ、あかしくらすほどに、つれづれもなぐさむやとて、和賀江のつき島、三浦のみさきなどいふ浦々を行てみれば、海上の眺望哀を催して、こしかたに名高く、面白き所々にもをとらずおぼゆ、

〔伊呂波字類抄見〕溲標ミチツクシ、或云、

〔伊呂波字類抄見〕氾ミチ 溲 澱 澱巳上同

〔書言字考節用集乾坤〕溲標ミチツクシ、勝示也、清和帝朝、難波津頭、水咫ミチ、衝石ミチ、葉

〔藻鹽草水邊〕溲標ミチツクシ、みなづくしと云と、土佐日記に見たり、

みをつくし身をつくす、かたによせてよむなり、みをじるし總而水のふかき所をば漂といふ、

あるべし、大略は海なり、多は江なり、○中略、わたすしのみをつくし、

〔顯註密勘四〕身をつくしとは、みをまゐるしなり、江河のふかき所に木をたて、これぞみをとまゐ

すれば、それをみをとしりて、船をばのぼりくだすなり、澱ともかき、溲ともかき、萬葉には水尾と

もかけり、又水咫衝石とかけり、國史には、難波江に始立溲標之由まゐるせり、其所をばみをつくし

といふと、土佐日記にみえたり、世俗には、みをまゐるしといひ、和歌には、身をつくしとよむを、歌に

みをまゐるしとよむ人侍り、くちおしき事也、

江水のふかきまゐるしにたてたる木と許心得たる、たがひ侍らざりけり、

〔袖中抄十九〕みをつくし

君こふる涙のところにみちぬれば、みをつくしとぞわれは成ぬる

顯昭云、みをつくしとは、河口などに、水のふかき所をば湊といふ、或は澱ともかけり、そのみをの

まゐるしにたつる木を云也、世俗には、みをまゐるしといふを、和歌には、みをつくしとよむ也、又水脈